雑誌「中央少年」

落合教幸
藤井淑禎

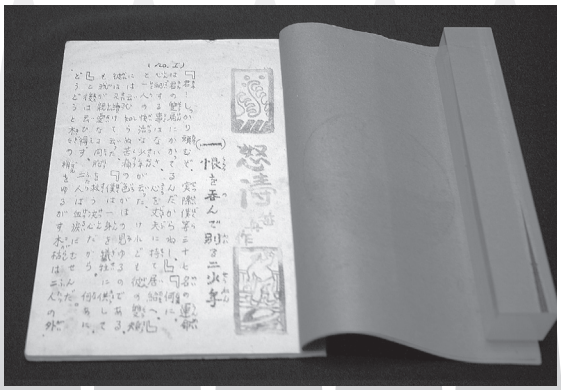
江戸川乱歩が作成したスクラップブック「貼雑年譜」には、乱歩の少年時代の記録も残されている。中学時代の記録として、「中央少年」という雑誌の表紙が貼り付けられ、そこにはこのように説明が付されている。

高等小学一、二年生(今ノ小学五、六年生)頃カラ友達ト少年雑誌ヲ作ツテ遊ブコトヲハジメ、最初ハ蒟蒻版次ニ謄写版次ニ活版ノ手摺リト印刷方法ハ色々デアツタガ、中学ノ上級生マデ絶エテハ続キ數種ノ雑誌ヲ発行シタ。

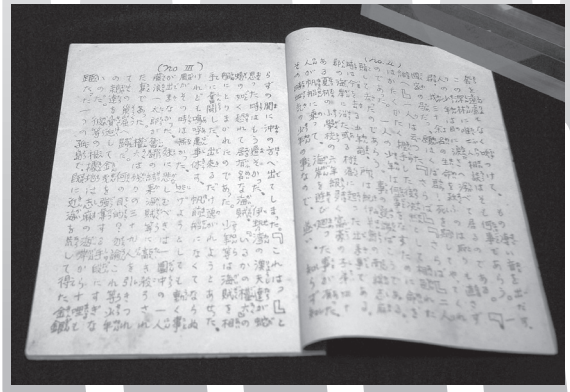
説明によれば、この雑誌の冒険小説「怒濤」と画物語「かなしき思出」が乱歩によるものとなっている。どちらの文章も短いものだが、後の乱歩作品の雰囲気が感じられなくもない。

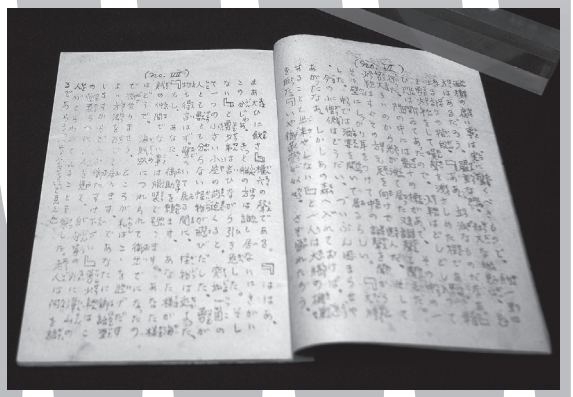
乱歩が少年時代に読んでいたのは「少年世界」「日本少年」「少年」といった雑誌で、投書などもしていた。こういった少年雑誌から「冒険世界」「武侠世界」へと移っていくのだが、この時期については「活字と僕と」(「現代」昭和十一年十月号、『幻影の城主』などに収録)というエッセイに詳しい。「少年時代の僕を、何が活字へ引きつけていたかというと、それは活字のみの持つ非現実性であった。活字がえがき出してくれる、日常の世界とはまったく違った、何かしらはるかな、異国的な夢幻の国への深いあこがれであった。」と乱歩はふり返っている。このような雑誌の影響を強く受けて、少年平井太郎は雑誌を発行したのである。

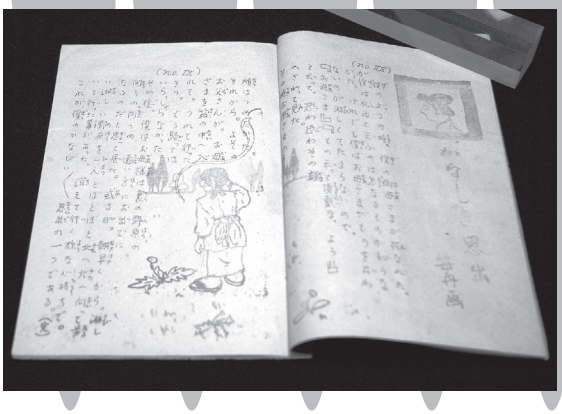
この後、小遣いで活字を買って印刷をするようにまでなるのだが、残念ながらその資料は残されていないようだ。中学を卒業する頃には、父が事業で失敗したため、こういった遊びは不可能になってしまう。これ以後もさまざまなかたちで乱歩は印刷・出版にかかわってゆくことになるが、その始まりにこの「中央少年」は位置づけられる。



撮影
東川直史
（立教大学大学院 前期課程）







怒濤

笹舟作

一　恨を呑んで別る二少年

『君！しっかり頼むぞ、実際僕等三十七名の運命は君の雙肩にかかってるんだからねー、』『何に、心配する事はないさ、心を丈夫に持て居給へ、』と一人の快活な少年が云った、けれども彼の雙頬には云ひ知らぬ苦痛の色がほの見ゆるのである、彼は又續けて云った、『僕は一身を犠牲に供しても我が親愛なる同胞を救う決心だから、何あに、』と後は云ひ得ず、二人は血涙にむせんだ。

どうどうと木々の梢をゆるがす木枯は二人の外套を遠慮もなく吹つけて、もの凄い音を出だす、この深林に唯二人相談はそも何事であらう。一人の少年は目に涙さへ浮べて居るのである。『君、我三十余名の生命を救ふのは取りも直さず國家の為だっ。願はくば君！死を期してやってくれ給へ』一人は云つた。『さらば』『さらば』二人はかたくかたく握手した後決然として相別れたのであった。一人の少年は何事をなすために命を賭して去ったのであらう。事の發端はこうである。時は今を去る五年前、所は紀伊半島の南端志麻郡の海岸に沿た或る村落に起った出来事である。ある夏村の小學校の六年級尋く富豪の子弟四十人が帆船に乗って、海岸を遊び廻った事が有った。その時血気の少年の事なので、遂い、

知らず知らずの間に沖の方へ出てしまった。『これはっ』と思った時はもう遅そかった、伊勢湾の漁夫達が蛇蝎の如く恐れて居有名な海賊、『いるかの權六』の船にとりまかれたのであった。少年等は海賊を相手に奮闘した、出來るだけ逸がれようとあせった、けれども嗚呼萬事休す、帆前船になくてはならぬ風がその時は無かった、逃げようとしても動く事が出来なかった、殊に悲しむべきは一團中の一人藤浪一太郎が奮闘の結果海賊等に蔵き殺ろされた事であった。權六は残りの三十九人を引きつれてその巣窟へ歸った。何の目的？勿論これ等少年の親達を脅迫して金銭を強奪する手段にすぎないのだ。彼等の根據地は志麻の海岸から十哩も距たった一つの孤島で、既に近海を荒して得た金銀宝石類はその島中に山をなして居のであらう。さきに林中に別れをつげた二少年、命を賭して去った方は浪島勇と云ひ、後に残った方はこれ等少年團から最とも敬まはれて居る武里忠良と云ふのであった。嗚呼浪島少年の前途は、はたして望あるものであろうか。

二　勇少年の奮闘

勇少年勇は學校でも第一の運どう家で又、誰れも彼に勝得るものは無かった程、彼は柔道の達人であった。彼の任務は海賊の船を奪って脱れ本國の救を求むるために行くので、迚も目的は達し得ないであらうが、萬一にも逃がれ得れば幸この上もない、第一の手段が失敗に歸すれば、又第二の手段もある。と相談は一決して、團中第一の強者、勇少年は派遣せられたのである。この大森林を脱れる迄には実に千難萬苦をおかした。勇少年が賊の住家を探し始めた時はもう夜であった。が、幸にしてそれはすぐ分った。賊の住家が餘りに壮大で且立派であったからである、勇はその動靜を覗がふのに又苦心した、石造の一揩作ではあるが、その面積の廣い事は実に驚くべきもので、約一里四方はあるだろう。嚴重な門、壯大な物見台、見上る計りの揩段、『ああ、立派なものだなあ。』と勇少年をして嘆聲を洩さしめた程である。幸ひ門は開ゐてあったので、少年はどしどし入って行った、門の中には數十の棟があって、その中の一等大きいのから光が洩て居った又話聲も聞えた。少年はすぐその方え足を向けて進んだ、そしてその壁にしっかり耳をつけて中の話聲を聞かうとした、中では酒宴を開いて居るらしい。『大將、今の小僧供はどうだい、づいぶん困まらせやあがったなあ、しかしあの森へ入れておけば、怎することも出来やしない』と一人は大將の機嫌を取た。『いや御苦勞々々、さぞ労れたろう、まあ大ひに飲さ』權六の聲である。『ははあ、この分じゃあ、きっと船の方は誰も居ないにきがいない』と勇少年は言ひながら引き返した。そして一つの小さい小屋の前迄くると、突如一箇の人とも獣とも分らない怪物が飛びだした、勇が物も得言はず、驚ろいて居る間に、怪物は近よった、『もし、あなた、御助を願ます、あなた様が海賊の仲間でない事は服装で別ります、あなた様はどうで、海賊奴につれられて御出でになったので御坐りませう、ところが私はこゝを逃げだすよい方法を存じて居ります、であなたに御話至しますからどうか御たすけ下さい』勇少年はこの痩衰ろへた老人を見て、自分等の外に澤山の人がとらわれて居ることを察した。老人は何を語るであらう。

（以下次号を以て見えん）

かなしき思出

笹　舟　画

僕の五つの時、僕の御母さまが死なれた。が僕は死ぬと云ふのは怎なるものか知らなかった。けれども僕はお母さまがものを云わないのが淋しくてたまらないので。

『お母さま』『もの云って頂戴な、よう！』と云って。恐わ恐わその顔へさわって見た。

その時お母さまの頬はつめたかった。

それから。よそのお父さんが。お母さまを箱の中へ入れて。つれて行ったきり。もう歸ってはいらっしゃらなかった。

その後。僕はお母様は裏の野原の向うの。向こうの。遠い方にお出でになるのだと思って居た。或る日。朝早くから。淋しい淋しい野原を一人とぼとぼと北へ北へ向って歩いて行った事があった。消えて行く様な心持ちで。これが僕のかなしい〜思出の一つである。

（完）

立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター
センター通信　第二号
二〇〇八年七月一日　発行
編集・発行　立教大学江戸川乱歩記念
大衆文化研究センター
〒二七一-八五〇一
東京都豊島区西池袋三―三四―一
電話番号　〇三―三九八五―四六四一
（FAX兼）
E-mail:rampo@grp.rikkyo.ne.jp
開室日
月・水・金曜（公開は金曜のみ）
（十時三十分〜十二時、十三時〜十六時）
資料閲覧には事前予約が必要です。